

天理教 江南支部だより

発行先 江南支部
発行日 立教187年1月1日
発行責任者 福西 努
発行住所 甲賀町上野461番地9

1月号 N0282



年頭あいさつ



江南支部長 福西 努

あけましておめでとうございます
昨年一年、支部管内の会長さんを始め、多くの方々のお力を頂いて大過なくつとめさせて頂く事ができましたこと、紙面をお借りいたしまして厚くお礼申し上げます。

教祖百四十年祭に向かう三年千日の活動としてようぼく一斉活動日が提唱され、いかに地域のようなくの方に勇んで頂けるのか、支部役員の方と相談し、半年に一回「ようぼく成人講座」を開催するような思いで、教えの根幹である元始まりのお話に始まり、おつとめ、おさづけと順次テーマを決め、開催することになりました。

10月29日に第一回を開催いたしましたところ、一六二名のご参加がありました。当日は、本来に来て下さるのだろうかと不安な思いがありましたが、秋晴れという大きな守護のお陰か、会場一杯の方に集まり頂くことができました。講話に耳を傾ける参加者の様子やアンケートによると喜んで頂けたのかなと思います。

そのアンケートの中に「久々に他の教会の方と出会い、うれしかった」という意見がありました。講話などで勇んで頂くことも大切ですが、また、系統を問わず地域のようにぼくが心を寄せ合い、互いに勇ませ合うということが、この一斉活動日の一つの目的であるのではないかと感じました。

立教一八七年、三年千日の二年目がスタートいたしました。真柱様は諭達ご発布の前から、一貫して「丹精」の大切さをお諭し下さっております。この度の秋季大祭の神殿講話におきましても「教祖は五十年の間、どんなことが起こっても諦めること無く丹精し続けられた」と、お諭し下さいました。

私は教会で少しばかりの畑で野菜作りをしています。野菜は植えただけでは多くの実りを与えてはくれません。毎日気にかけて、声をかけて少しばかりのお世話をすると、ちゃんと応えてくれます。しばらく手入れを怠っても、少し頑張つてやれば、見事に蘇ってくれます。

この度は、特に真柱様のおっしゃる「既にようぼくになってはいるが、今いったん休憩している人」に対しても系統を超え、近くに住まう者が、声を掛け合い、辛抱強い丹精を心掛けたいものであります。

ようぼく一斉活動日、その日だけに終わることなく、日々の活動に重きをおいて、教祖百四十年祭を感激をもつて迎えられよう通らせて頂きたいと思いますので、支部管内の皆様にはなお一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

朝の信仰読本

中山慶純著

おぢばは人生の「コツ」を習うところ

きょうと

修養科や教人資格講習会の受講などで、おぢばに長期間滞在していて、子供や孫、あるいは友人・知人から「天理で何をしているの?」と聞かれたことはありませんか。そのときにどう答えるか、日ごろから考えておくのも大切なことだと思います。

「いつも楽しく生き生きと過ごし、人生をより素晴らしいものになりたいんだ。だから神様の教えを通して、その方法を学び、心に治めて、体を使って実践しているんだよ」

これも一つの答え方でしょう。

特に、信仰を伝えたい子供や孫には「“人生のコツ”を習っている」と話してみてはいかがでしょう。

人生のコツの一つは、「自分にとって楽なことを選ぶのではなく、つらいこと、苦しいこと、嫌なことを選び、進んでさせていただく」ということです。

たとえば、思わぬ方向からボールが

飛んできたとします。自分の身の安全のためにボールを避けると、周りの人に当たってしまうかもしれません。うまくキャッチできたら、自分はもちろん、周りの人も当たったり、ケガをしたりしなくて済みますよね。

人から何か用事を頼まれたときも同じです。すぐに「はい」と返事をして引き受ける人もいれば、「嫌だなあ」と思いながら渋々引き受ける人、あるいは、むげに断る人もいます。

嫌なことを避けて楽を選ぶと、必ず困る人が出てきます。自分が避けたことで人を苦しめてしまう。これは、お道の教えに反する行いです。二つ返事で快く引き受けると、相手は喜んでくださるし、周囲の人にも楽をしてもらえる。これが、自分自身が幸せになる人生のコツなのです。

また、人間はややもすると、憎しみ、恨み、欲など心のほこりをどんどん溜め込んでしまいます。教祖は、それが不幸せの元になると教えてくださいました。「八つのほこり」の教えをよすがに、それらを払って幸せを貯める方

法も、おぢばで学ぶことができます。これも人生のコツです。

教理を学ぶときやひのきしんをするとき、子供や孫の顔を思い浮かべてみてください。「あの子たちに、どうやって信仰を伝えていこう」と考えながら取り組むうちに、教えがすつと胸に治まるようになり、心に力がついてきます。人生のコツをいち早くつかんで、周囲の人たちに「お道を信仰していると、こんなにも幸せに過ごすことができるんだよ」と教えてあげてほしいと思います。

みんなの教理勉強

だめの教えって素晴らしい

飯田照明



だめ（究極）の教えの何とありがたいことか！

はじめて、本当の救いとは何か、そのためにどうすればよいかを教えられたどの教えでも宗教であるかぎり、救

いを目標としている。

仏教の救いは釈迦が教えられた四苦八苦からの救いである。縁起（空）を悟り、煩惱からの解脱こそ真の救いであるとする。大乘仏教には、宗派ごとにそれぞれ違った救いがある。例えば浄土や極楽に行くこと、この世で成仏し、仏と一体化すること、無の境地になることなどがある。

キリスト教では、イエスをキリスト（救世主）と信じることで神との繋がりを再び回復し原罪をつぐない、死後天国で神と共に幸せに生きることである。

イスラームでは教えや戒めを守り、アッラー（神）の恵みを受け、死後、天国で生きることである。

その他、救いとは何かについて、宗教の数ほどたくさんの教えが説かれている。

お道では。人間が一人残らずこの世で陽気ぐらしをすることである。親神さまが人間の陽気ぐらしをするのを見て、一緒にお楽しみくださることであ

る。神と人間、親と子が共に楽しむことである。

はじめて、**病の元は何かを教えられた**教祖は「病の元は心から」と教えてくださった。

病の元とは単に身体の上の病気の原因だけではない。身体的な病気は細菌やウイルスや遺伝子の異変などによって起こる。しかしその場合も体内に自然治癒力や免疫力があれば、発病しないケースも多い。その免疫力は心の持ち方が大きく作用する。ストレスによって起こる病気や心因性の病について心身医学が明らかにしている。外傷による病の場合には、そういう外傷をなぜ他の人でなく自分が受けなければならぬのかという、心のほこりやいんねんの問題がからんでいることを悟らねばならない。

病の治療について言えば、最近では医師は皆、心の働きが病気を治すのに大きく作用すると言っている。病を治すための心の持ち方の影響の大きさは今や常識となっている。免疫力や自然

治癒力の大切さは科学的に証明されている。

病の予防に対しても、心が持っている大きな働きについては誰でも知っていることである。病原菌やウイルスに強い抵抗力や免疫力を持つ健康な身体をつくるためには、心の働きがもっとも大きく左右すると言われている。いつも前向きに、プラス思考で積極的に明るく陽気な心で生きることが、病気の予防と治癒のために一番大切なことである。いつも感謝の気持ちで生きることが健康の秘訣である。

病は親神さまからの「しらせ」であり、「ていれ」である。

お道では、病を通して心のほこりや魂のいんねんを、親神さまがお知らせくださっていると悟るよう教えられている。心の汚れやけがれを洗い清めるために親神さまから与えられた警告として受け取り、反省し、教えられた通りの心遣いをして生きていくとき、どんな病気にも強い身体をご守護いただけるのである。

病の元は心からとは、健康に生きるための心の正しいあり方、持ち方、遣^つい方を教えられたと言える。

教祖ご在世当時は、多くの人は病とは悪しき靈のたたりであるとか、憑^つきものがついているからだとか、また悪い神の罰^ばのせいであると信じていた。それに対して教祖は、一人ひとりが自由に使ってよいと許された心の遣い方の誤りのせいであり、一人ひとりの自主的で主体的な心の遣い方にその原因があると教えられた。全く今までにな^い、目の覚めるような新しい病の元についての真理を説き明かされた。

それが、今ようやく人々はその正しさが分かるようになってきているのである。

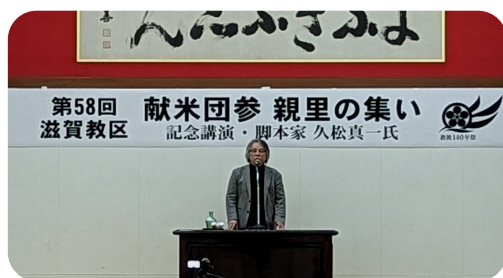
去る11月26日、本部月次祭に合わせ、教区主催の献米団参及び親里の集いが4年ぶりに開催された。親里の集いには、ようぼくで今最も活躍されている一人と言われる脚本家の久松真一氏が演壇に立たれ、ドラマ制作の裏話や、自分自身のふしを通して「人をたすけてわが身救かる」とお聞かせ下さる教えの素晴らしさを体感された話や、ようぼくとして

年祭に対する思いなどを熱心にお話しいただいた。

また、お寄せいただいた献米は、9,550kgであった。



各教会、布教所よりお供えされた献米は、早朝より、各支部ごとにトラックで炊事本部に運び込まれた。



1 月支部にをいがけデー

1 月28日午前9時～

拠点教会 甲南分教会 甲南町深川1878番地